

令和3年度都立看護専門学校推薦入学試験小論文課題

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

数学をしていると、それまでわからなかったはずのことがある瞬間にふとわかる経験をすることがある。それは、数学を学ぶ最大の喜びの瞬間でもある。

高校時代の僕はその喜びをまだ知らず、ただ受験科目の一つとして数学を学んだ。問題集の解答をくり返し書き写して解法を「暗記」して、それで試験を突破するという、今にして思えば最悪の勉強の仕方をしてきた。それによって知識やテクニックは身についても、肝心の「わかる」という経験の喜びを味わうことはできなかった。

大学に入って岡潔のエッセイに出会い、自力で解く前に解法を知ると、「それはもう解けない問題になってしまう*」と彼が書いているのを読んで、はじめて、解答を閉じて問題と向き合うことを知った。問題を頭に入れて、あとは白紙と対峙する。それはとても怖いことである。

白紙と向き合う時間は、地図のない森をさまようのにも似た心細さがある。つい誰かに道をたずねたくなる。そこをぐとこらえて、ただ自分の身一つで、白紙と辛抱強く向き合う。

方針を立てる。計算してみる。幾度も失敗をくり返ししながら、それでもあきらめずに挑み続ける。そうすると、ときに本当に、真っさらの紙から始めて自分で歩いて、わかってしまう瞬間がある。最後までどうしてもわからないことももちろんあるが、最初はさっぱりわからなかった問題を、独力で解決した瞬間の喜びは格別である。

わからない自分が白紙と向き合い、辛抱強く試行錯誤をくり返しているうちに、ある瞬間「わかった」自分に変わるのだ。それはまるで母親の胎内にある日突然いのちが宿るような、「零」^{ゼロ}から何かが生まれる鮮烈な体験である。それがどんな小さな、とるに足らない発見だとしても、白紙から始めて、自力で何かをわかる瞬間の喜びは何ものにも代え難い。

* 「すみれの言葉」(『岡潔「日本の心」』所収)

出典：森田真生著 (2019) 「数学の贈り物」

株式会社ミシマ社

(設問)

著者が伝えたいことを200字程度に要約した上で、「わかるということ」について、体験を踏まえたあなたの考えを、要約を含めて800字程度で述べなさい。